

【日本GUIDE/SHAREの活動状況】

プロジェクト・チームの活動をさらに重視。

日本GUIDE/SHARE(以下、JGS)は、IBM製品を利用する国内ユーザーが交流・研究を図るためのユーザー組織です。米国のGUIDE(Guidance for Users of Integrated Data Processing Equipment)およびSHARE(Society for Help to Avoid Redundant Effort)をモデルに発足した国内の2団体が、約35年前に合併して生まれました。

JGSの会員は、大会や研究会などへの参加を通じて、最新のIBMの戦略や情報を入手し、またプロジェクト・チーム活動を通じて自社の技術向上や他社との技術交流を図るとともに、会員の意見や要望をIBMの製品やサービスに反映させることができます。

JGSの2004年度(2003年10月～2004年9月)の活動について、幹事長 曾谷 雄三氏(株式会社アシスト 特別顧問)に話していただきました。聞き手は本誌編集長 斉藤 功です。

会員の変化に対応する活動を

JGSの最近の動向について、お話しいただけますか。

曾谷氏 まず会員の業種や業態が大きく変わってきたということが挙げられます。最近になって企業のIT(Information Technology: 情報技術)部門のシステム子会社化が一段と進んだ結果、一般



日本GUIDE/SHARE 幹事長
曾谷 雄三氏(株式会社アシスト 特別顧問)

企業の会員が減って、その代わりにソフトウェア・ハウスやシステム・インテグレーターなどのIT関連会社の割合が増えています。会員企業の性格が大きく変わってきているということです。

また、JGSの活動は、毎年春に開催される中堅技術者向けの「IT Conference」と、上級管理者向けの「秋期大会」が、年間を通じた2大イベントとなっています。大きなイベントがあるのは悪いことではないのですが、ただ、どうしてもそれにより活動の枠が決まってしまうということがありました。大会の開催には莫大^{ばくだい}な費用が掛かりますから、会員会社に参加者を募っていただくことも行わずを得ません。JGSの活動全体が、何をおいても「大会の成功」を目指してしまうという傾向があったわけです。

その一方で、IT Conferenceや秋期大会のJGSの活動を支えている幹事はすべてボランティアであり、企業の経営環境が非常に厳しくなっている折から、幹事を送り出す企業そのものに、かつてのようなゆとりがなくなってきています。先程、会員企業の業種が大きく変わってきたという話をしましたが、一般企業のIT部門の企画部隊であれば業務の性格上、時間的に余裕もありましたし、明日のビジネスにつながるということで、社員がこうした活動に精力を注ぐことにも寛大でした。ところが、会員会社の構成が変わり、幹事を送り出す側の状況が変わる中で、今までと同じような大会を開催していてもいいのかという疑問が生じてきたのも事実です。少なくとも、ボランティアである幹事の負担を減らすことが要求されてきています。

こうした近年の動向をかんがみて、幾度か議論を重ね、昨年6月に企画広報委員会から機構改革に取り組む検討

チームを発足させることを提案しました。この提案が幹事合宿の席上で採択されまして、JGSの改革に取り組むことになったのです。

プロジェクト活動をより魅力的なものに

その結果、改革の音頭を取られることになったわけですね。

曾谷氏 2003年度から幹事長を引き受けることになりましたから、結果的にはそうなりますね。

まず考えたのは、大会などのイベントを中心に据えるのではなく、技術そのものに回帰しようということです。その中心となるのは、やはりプロジェクト・チームの研究活動でしょう。2003年度は45チーム、約320名が、2004年度は33チーム、約280名が参加していますが、もっと活性化したいと考えました。

もちろん、単にチーム数や参加者を増やすということではなく、より優れた研究をしてもらい、われわれとしてもそれにこたえるための発表の場を設けていこうということです。実は、プロジェクト・チームの研究活動の発表の場は意外と少ないのです。確かに優秀論文に選ばれば、IT Conferenceなどで発表するという晴れ舞台が待っていますが、それ以外の多くの論文はJGS内部の発表会のみです。しかも5部門に分かれての発表となりますので、いわば仲間内での発表ということになってしまいます。そこで2002年には、5部門が一堂に会して5日間連続で発表を行い、相互乗り入れができるようにしました。JGS内部とはいえ、以前より多くの人に聞いてもらえるようになったわけです。さらに2003年の発表では、前年の反省を踏まえて、1日で同時に五つのストリームを流す形式に変え、1日です

べての発表を行いました。

また昨今は、エンジニアといえどもプレゼンテーションの能力が求められるようになってきました。限られた時間でいかに正確に内容を伝えるかという技術がますます重要となっているのです。そこで、プレゼンテーション賞を創設し、論文の内容とは関係なく、効果的な発表を行ったチームには授与することにしました。

このように、発表会についてはその方法や形式について試行錯誤している段階ですが、いずれにせよJGSの重要なイベントとして、できる限り支援していこうと考えています。

プロジェクトのスタートも、プロジェクト・チームの全員が集まったのキックオフを実施するようにしました。スタート時からJGS全体の重要なイベントとして認知し、全面的に後援していく形にしたわけです。研究活動に参加するメンバー全員に一体感を持ってもらおうということです。

外部との交流や情報発信も

今回の改革では、外部との交流や情報発信も重要なテーマの一つになっているということですが？

曾谷氏 外部への情報発信ということでは、2003年春に広島で開催したIT Conference 2003で、論文発表を地元の大学関係者に無料で公開しました(本誌No.38、112~114ページ参照)。オープニングには中国地方の幾つかの大学の学長においでいただきましたし、研究者の方々や学生の皆さんに各セッションを聴講してもらった結果、「地域のITの振興に道を開ききっかけとなった」という言葉をいただきました。そこで2004年4月の福岡大会では、大学関係者や学生さんに招待論文を発表していただく場を設けようと考えています。

外部への情報発信という意味では、プロジェクト・チームによる単行本の執筆もありますね。

曾谷氏 その点では、斉藤さんがアドバイザーとして参加しているプロジェクト・

チームが、研究の成果をまとめて何冊か本を出していますから、そのノウハウをぜひ横展開していきたいと考えています。現在8冊ほどをJGSのWebページで紹介していますが、まだ少ないと思っています。毎年2、3冊出せるようになればいいですね。

単行本化については、できる限り協力させていただきたいと思っています。外部との交流といえば、国際化への対応も進めているとのことですが？

曾谷氏 2003年8月に、米国SHAREの大会を視察してきました。5日間連続の大会で、合計で700以上のセッションが走っていました。参加してとにかく疲れましたが、あの熱気はJGSの活動にもぜひ取り入れたいですね。いずれにせよグローバル化が進む今日、国内だけを見ては先に進めません。残念なことです。ITの先見性はまだまだ米国にあることも事実です。そこで積極的に海外と交流し、そこで得た情報を会員にフィードバックしていけるように国際担当の幹事を新たに置くことにしました。

また、米国SHARE、ヨーロッパのGUIDE SHARE EUROPE、オーストラリアのINTERACTION AUSTRALIA、そしてJGSによって構成されるIUGC (International User Group Council)の会議が2004年には日本で開催され、われわれがホストを務めることになっています。国際化の推進については、まずはこの会議を成功させることが当面の大きな目標です。

よりダイナミックな改革を

既に幾つかの改革の成果が挙がっているようですが、今後の展開についてはどうですか？

曾谷氏 改革については道半ばというのが正直なところですが、JGSの幹事長の任期は通常2~3年なのですが、後進を育てるということを考えると、私のような老兵はさっさと引退すべきだと考えています。実は、改革を促進するためにも、私



は1年間という条件で幹事長をお引き受けしたのですが、実際に取り組んでみると1年間で改革を終わらせることはできませんでした。しかし、ある程度めどがついたところで、なるべく早く若い方に代わるべきだと考えています。改革途上なものですから、通常の任期にこだわることはなく、もっとダイナミックにやらなければなりません。

これは任期だけの問題ではありません。プロジェクト・チームの活動も、原則は1年間で、10月に始まり翌年9月に終わりますが、これだけビジネスの環境や技術が激しく変化する時代に、10月まで待たないと新しいプロジェクトをスタートできないというのは世の中の動きに乗り遅れかねません。明日からでもスタートでき、3カ月・6カ月で終わるプロジェクトがあってもよいではないですか。そこで特別プロジェクトを設けました。いつでもスタートでき、期間も自由に決められるというプロジェクトです。

いろいろな面で、特別プロジェクトのようにダイナミックに改革に取り組むことが、JGSの今後の課題だと思っています。

INFORMATION

【IT Conference 2004 概要】

- 大会テーマ
創発するテクノロジー、新たな躍動、新たな可能性
- 開催期間
2004年4月27日(火)~28日(水)
- 開催場所
福岡コンベンションセンター
- 参加予定者
約1,000名
- セッション
8ストリーム、48セッション以上